日本語の複合動詞「～出す」の自他交替についての一考察

森　川　文　弘

1．序論

日本語の「出る」「出す」は、前者が自動詞、後者が他動詞であり、これらが複合動詞「V-出る」「V-出す」となっても基本的にそれは変わらず、前者のVには自動詞、後者のVには他動詞が当てはまる。

(1) a.（人が）部屋から走り出る【自動詞】
　　b.（人が）部屋から荷物を運び出す【他動詞】

しかし、自動詞の中には「V-出す」という複合動詞に現れるものがある。

(2) a.（人が）部屋から飛び出す【自動詞】
　　b.（水が）池からあふれ出す【自動詞】

本稿では、認知言語学の立場からこの現象を分析し、本来他動詞であるはずの「V-出す」が自動詞として用いられるようになる仕組みを分析する。また、同じ自動詞である「V-出る」との意味の違いについても考察し、同じ動詞Vを元にした「V-出る」と「V-出す」の容認性の違いやニュアンスの違いについて分析する。[*1]

2．先行研究

2.1. 姫野（1977）

姫野（1997）は、「-出る」「-出す」と共起しうる動詞を収集、分類している。それによると、「-出る」「-出す」の両方と共起する動詞あるいは無意味形態素は30種ほどある。

表1は「V-出る」が「V-出す」に言い換えられるかどうか、表2は「V-出

表1.「V-出る」の複合動詞（姫野 1977: p.75）

前項要素＼後項要素	(a) 同一の文脈で「出る」が「出す」と言い換えられるもの	(b) 言い換えられぬもの
(1) 「外部に出る」という意味を含むもの	湧き出る（湧き出す），溢れ出る，浮き出る，浮かび出る，にじみ出る，ほとばしり出る，こぼれ出る，萌え出る	生まれ出る，咲き出る，現れ出る
(2) その意味を含まないもの（移動の方法・様態を示すもの）	這い出る（這い出す），転がり出る，転げ出る，飛び出る，滑り出る，走り出る，漕ぎ出る，にじり出る，流れ出る，しみ出る，溶け出る，ふき出る，突き出る，迷い出る，さ迷い出る，漂い出る，逃げ出る，逃れ出る，抜け出る，忍び出る，浮かれ出る	輝き出る，進み出る，捧げ出る，歩み出る，泳ぎ出る，躍り出る，暴れ出る，ひょろけ出る，よろばい出る，ゆらぎ出る，ゆるぎ出る，抜きん出る
(3) 接頭語・無意味形態素	はみ出る（はみ出す）	おん出る，さし出る

表2.「V-出す」の複合動詞（姫野 1977: p.81）

前項要素＼後項要素	(a) 同一の文脈で「出す」が「出る」と言い換えられるもの	(b) 言い換えられぬもの
(1) 「外部に出る」という意味を含むもの	湧き出す（湧き出る），溢れ出す，浮き出す，浮かび出す，にじみ出す，ほとばしり出す，こぼれ出す，萌え出す	
(2) その意味を含まないもの（移動の方法・様態を示すもの）	這い出す（這い出る），転がり出す，転げ出す，飛び出す，滑り出す，走り出す，漕ぎ出す，にじり出す，流れ出す，しみ出す，溶け出す，ふき出す，突き出す，迷い出す，さ迷い出す，漂い出す，逃げ出す，逃れ出す，抜け出す，忍び出す，浮かれ出す	張り出す，せり出す，駆け出す，起き出す，（人が）繰り出す
(3) 接頭語・無意味形態素	はみ出す（はみ出る）	おん出る，さし出る

す」が「V-出る」に言い換えられるかどうかを表にまとめたものである。「V-出る」「V-出す」の交替を起こすのは（a）の欄に挙げられている30ほどの例においてであり、そこに現れる動詞Vはいずれも自動詞である。その中で（1）のグループでは、動詞V自体が単独で「外部や表面に出る」という意味を含んでおり、「-出る」「-出す」はそれを強調しているにすぎない。それに対し（2）のグループでは、動詞V自体に「出現」の意味は含まれず、主体の移動の方法や様態を表し、「-出る」を修飾するような意味になっている、と分析している。

この分析は、この交替に生じる動詞のバリエーションを明らかにし、そこに出現する動詞Vを意味によって分類した点で価値があるが、ほぼ事実の記述

に終始し、なぜ（a）の例だけが交替でき、（b）の例は交替できないのかについての分析は行われていない。

2.2. 日野（2002）

日野（2002）は、他動詞も自動詞も含めて「V-出す」という形式を、「V-て出す」と言い換えられるかどうか、「V-て出る」と言い換えられるかどうかによって分類することを提唱している。この分類によると本論文の対象としている複合動詞群は、「『V-て出す』と言い換えることはできず、かつ『V-て出る』」と言い換えることができるもの」に分類される。

しかしこの分類方法では、「V-出す」が「外部への移動」の意味を持ちながら、かつ「V-出る」と言い換えられないものを、「開始」の意味に分類することになる。例えば「（家の外へ）駆け出す」「（新しい事業へ）乗り出す」のような例は、意味としては自動詞的であるが、「*駆け出る」「*乗り出る」のように言い換えられないために、「開始のアスペクトを表す語」に分類されている。[※2] しかしこれらが「駆け始める」「乗り始める」の意味でないことは明らかである。

2.3. 徐(2007, 2008)

徐（2007, 2008）は、「V-出る」が「V-出す」と交替できる場合でも、後者の場合には動作対象の意志性が感じられる点で前者とは意味が異なると分析している。

（3）a. 満員電車に揺られる会社勤めを終えた後は、マンションを抜け出して（*抜け出て）広々した田舎で暮らしたいと考えるようになっていた。
(=徐(2007): 17)

b. 5人とも個性があふれ出ていて（*あふれ出していて）気持ちがいい。
(=徐(2007): 19)

c. 「竹酢を加えると、豚肉特有のにおいが消え、保水力がアップし、肉汁が流れ出ない（?流れ出さない）効果があるんです」と生産者の木島敏明さん（57）。
(=徐(2007): 20)

d. 雨水がいっきに川に流れ出さない（?流れ出ない）ように一時ためておく下水道の施設。
(=徐(2007): 21)

（3a）では「抜け出す」の方が「マンション暮らしからの脱出」を決意した動

作主の強い意志が感じられるのに対し、「抜け出る」ではそれが感じられない。(3b) では逆に、「作家の個性が作品から自然にあふれ出ている」という意味にするべきであり、そこに意志性は感じられないので「あふれ出す」は容認されない。(3c) では、肉汁が「自然に流れ出る」ことを防ぐ、(3d) では雨水が「流れ出そうとする」ことを防ぐ、という意味になるように、それぞれの表現が選択されている。以上が徐による分析である。

しかし、筆者の母語話者としての判断では、確かに (3a) に関しては「抜け出る」よりも「抜け出す」の方が自然に感じられるが、その他の例に関してはそれほど容認性に差はなく、意味の差もないように思われる。特に (3c) に関しては、どちらの表現も容認でき、意味の違いは感じられない。「肉汁が流れ出さないという効果があるんです」「肉汁が流れ出さないようにする効果があるんです」とするとさらに自然で問題ない表現となるため、「自然に出る場合には『V-出る』、動作対象の意図性が感じられる場合には『V-出す』」という徐の主張には無理があるように思われる。

仮に (3) の例の容認性について徐の判断を受け入れるとしても、やはり両方の表現が可能で、意味にあまり大きな差が感じられない例は他にたくさんある。

(4) a. この時、舞台に立った子供たちの生き生きとした表情に目がくぎ付けになり、涙があふれ出た (＝あふれ出した)。 (=徐(2007): 4)
b. 目頭からは、熱い涙があふれ出した (＝あふれ出た)。(=徐(2007): 11)
c. こすったストローを蛇口から流れ出る (＝流れ出す) 水道水に近付けると「水道水は引き寄せられる」という生徒と、「離れる」という生徒に分かれてしまった。 (=徐(2007): 5)
d. パリッとした春巻きの皮とトロリと流れ出す (＝流れ出る) 半熟卵の対比、半生状態の紫タマネギとツナの食感の違い。 (=徐(2007): 13)

徐は (4c) (4d) の例に関して「言い換えが可能ではあるが、意味内容が同一ではない」と述べているが、どのように意味が異なるかについての詳細な説明はしていない。実際筆者にはこれらの例の意味内容についてあまり差は感じられず、このような言い換えが成立するすべての例に関して、「『V-出す』では動作対象の意志性があり、『V-出る』ではそれがない」という説明は受け入れられない。

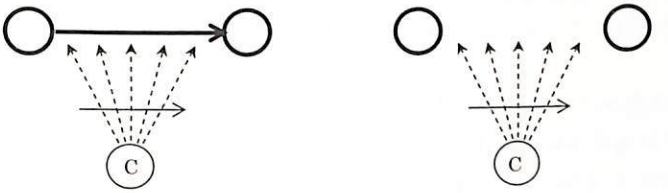
3．考察

3.1.「出す」の主体化

動詞の「出す」は本来、「一定の範囲内にある物体に力を加えて、その範囲外に移動させる」という意味である。補助動詞の「-出す」もこの意味を受け継いでいる。

(5) a. 引越しの際、部屋から大量の本を運び出すのに苦労した。
　　b. 運動会でよくあるのが、粉の中から口だけを使って飴を探し出すゲームだ。
(6) a. その紙を火に当てると、文字をあぶり出すことができる。
　　b. そのニュースを聞いて、自分の子供時代のある事件を思い出した。

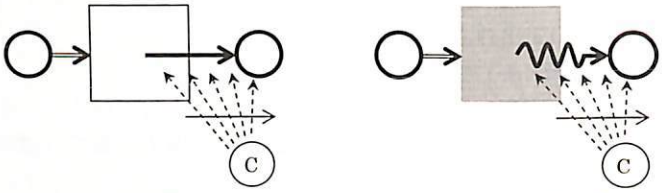
(5) は「運ぶ」「探す」という行為によって、ある範囲から物体を外へ移動させる動作を表している。(6) では物体を移動させたわけではないが、それまで見えなかったものや意識していなかったものを、見えるようにしたり認識したりする行為を表している。これらの例に見られるのは、Langacker（1999, 2002）の提唱する「主体化」という現象である。客体の観察に内在していた話者の主観的な関わり方を表す意味が浮き出してくるというものである。



(a) 実際の移動　　(b) 主観的な移動の解釈

図１．主体化（Langacker 1999: p.298を改変）

「車が走る」という場合、話者（概念化者）がその車の走る道筋を目で辿るという認知プロセスが随伴する。車がない場合でも同様に、話者は主観的に道路を目で辿り、「道路が走る」という表現を生み出す。具体的な物体の移動がなくても、概念化者はそこに主観的な移動の意味を見出すのである。



(a) 移動の認知　　(b) 出現の認知

図2．補助動詞「-出す」の主体化（移動から出現へ）

図2で、円はこの出来事への参与者を、Cは概念化者を表す。二重矢印はエネルギー伝達を、一重矢印は移動を、波線矢印は状態変化を、破線矢印は心的アクセスを示す。[※3] 前述のように、「出す」の基本的な意味は「一定の範囲内（図2（a）の四角形）にある物体に力を加えて、その範囲外に移動させる」であるが、この行為には出現した物体の概念化者による認知が随伴する。この概念化者の認知の側面に焦点を当てると、物体の移動がなくても、見えなかった状態（図2（b）の四角形）から見える状態に変化することを「V-出す」と表現できるのである。

表1・表2（a）にあるような自動詞の例でもこの意味は引き継がれている。

(7) a. キュウリに塩をまぶしておくと、水分がしみ出してくる。
　　b. 彼女はすごく色白で、腕なんか静脈が浮き出して見える。

(7a) は水分がキュウリの外へと文字通り出てくること、(7b) は通常見えにくいはずの血管が見える状態になっていることを表している。これらの例から、補助動詞の「-出す」は、自動詞に連結されても、動詞の「出す」の意味を受け継いでいることがわかる。

3.2. 「-出す」の自動詞用法

ここで問題になってくるのは、なぜ他動詞であるはずの「-出す」が自動詞に連結できるのかである。しかも、自動詞に連結でき、ほとんど意味の変わらない「-出る」という補助動詞が存在するにもかかわらず、である。

(8) a. キュウリに塩をまぶしておくと、水分がしみ出してくる（＝しみ出てくる）。

b. 彼女はすごく色白で、腕なんか静脈が浮き出して（＝浮き出て）見える。

本稿では、「-出す」の自動詞用法は「-出す」の他動詞用法から派生したと提案する。

(a) 「-出す」(他動詞)　　(b) 「-出す」(自動詞)

図３．補助動詞「-出す」のスキーマ[*4]

図３（a）では、外部から別の参与者がエネルギーを加えることによって、ある参与者が何らかの範囲外へと移動している。図３（b）ではこの２つの参与者が合成されることで、自ら内在的に持つ力や性質によって何らかの範囲外へと移動することを表している。ただ範囲外へと移動するだけであれば自動詞の「V-出る」で構わないわけだが、この「自身を外へと押し出す力」のイメージから、付随的にさまざまなニュアンスが生じる。

3.2.1.「結果状態に焦点がある」

いくつかの例では、「V-出る」ではそのプロセスに焦点があり、「V-出す」では結果状態に焦点があるというニュアンスの差が見られる。

(3) a. 満員電車に揺られる会社勤めを終えた後は、マンションを抜け出して（?抜け出て）広々した田舎で暮らしたいと考えるようになっていた。
(=徐(2007): 17、ただし容認性の判断は筆者による)

「抜け出る」では人物が実際に建物からコソコソと出て行く様子が想起されるが、「抜け出す」にはそのようなリアルさはなく、むしろ「外へ出た」という結果状態が強く意識される。(3a) の例で問題になっているのは文字通り「建物を脱出すること」ではなく「都会暮らしをやめること」であるため、結果状態に焦点を置いた後者の方が容認されやすいものと考えられる。

(9)a. ライオンが動物園から逃げ出した（?逃げ出た)。
b. こんな辛い状況からはとっとと逃げ出したい（*逃げ出たい)。

姫野（1977）も日野（2002）も、「逃げ出る」という表現を容認可能としているが、実際にさまざまな文脈の中で使用しようとすると違和感がある。(9) のような例では「外へ出る」ことが重要なのであり、そのプロセスは重要ではない。「ライオンが檻から逃げ出る」というと、ライオンが檻の狭い隙間に体をねじ込んで脱出しようとしている様子が思い浮かぶ。「逃(のが)れ出る／逃(のが)れ出す」「這い出る／這い出す」「駆け出る／駆け出す」などにもかすかながら同様のニュアンスの違いが感じられる。また、意志性の有無の差がある場合もある。

(10) 危険だから道路に飛び出るな（飛び出すな）。

徐（2007）は（3a）の例で「『V-出す』には強い意志性が感じられ、『V-出る』にはそれがない」と論じているが、(10) ではむしろ「V-出る」の方が故意に行われる印象が強い。「うっかり飛び出る」「わざと飛び出す」という言い方も可能ではあるが、「わざと飛び出る」「うっかり飛び出す」の方が自然な組み合わせである。「飛び出る」プロセスに注目しているか、「飛び出す」という結果に焦点を当てているかの違いが、このニュアンスの差を生み出しているものと考えられる。

(11)a. 侍従は宝剣を捧げ持ち、うやうやしく皇帝の前に進み出た（*進み出した）。
b. 「待て！」という声とともに、一人の男が躍り出た（*踊り出した）。
c. 捕ったと思った瞬間、グローブからボールが転がり出た（?転がり出した）。
d. 芸能記者に見つからないよう、こっそりと家を忍び出た（?忍び出した）。

(11a)（11b）は明らかに「V-出る」の方が自然で、「V-出す」とすると「V-し始める」の意味に解釈されてしまう。(11c)（11d）の「V-出す」は姫野（1977）で容認可能とされていた例に含まれるが、筆者の判断では不自然に思われる。これらの例は参与者が何かの中から外へ出てくる様子を描写したもので、プロセスに焦点を当てる「V-出る」の方が好まれる。

(12)a. このようにして地面からお湯が湧き出る（湧き出す）のです。
b. その紙を火であぶると暗号が浮き出る（浮き出す）のだ。

(a) 「-出る」(自動詞)　　(b) 「-出す」(自動詞)

図4．補助動詞「-出る」「-出す」のイメージ

液体の場合にも同様のニュアンスの違いが感じられることが多い。(12a) で「湧き出る」という表現は、お湯が地面の穴を通って進む様子を想起しやすいのに対し、「湧き出す」の方はむしろ「最終的に、湧き出す」という結果状態を想起しやすい。(12b) で「浮き出る」は徐々に浮き出てくる様子をイメージするが、「浮き出す」は文字が完全に見えるようになった状態を示しているように感じられる。「吹き出る／吹き出す」「溶け出る／溶け出す」「染み出る／染み出す」「滲み出る／滲み出す」「浮かび出る／浮かび出す」でも同様の微妙なニュアンスの差が感じられる。

このような差が出るのは、「自身を外へと押し出す力」のイメージから「通常よりも強い力がはたらき、確実に外へ押し出される」という意味が連想されるからだと考えられる。その意味では図3 (b) のイメージから付随的に派生したものであると言える。

3.2.2.「抵抗が感じられる」

いくつかの例では、「V-出る」はスムーズさを感じさせるのに対し、「V-出す」はそれを止めようとする抵抗があることを暗示する。

(4) b. 目頭からは、熱い涙があふれ出した (あふれ出た)。
(=徐(2007): 11、ただし、ただし容認性の判断は筆者による)
c. こすったストローを蛇口から流れ出る (?流れ出す) 水道水に近付けると「水道水は引き寄せられる」という生徒と、「離れる」という生徒に分かれてしまった。(=徐(2007): 5、ただし容認性の判断は筆者による)

(4a) では、「涙があふれ出た」の場合には涙がスムーズに流れ出ている印象を、「涙があふれ出した」の場合には目の中にとどめておこうと努力してもこらえきれずに流れ出てしまったような印象を受ける。(4c) では、通常水道の

水はスムーズに流れるので「流れ出る」の方が自然な表現であり、「流れ出す」にはやや不自然さを感じる。

(13)a. 寒くて、なかなかベッドから起き出せない（?起き出られない）。
b. おや、今日はこんなに早く起き出して（起き出て）来たのか。

（13a）の場面では、ベッドから出ることに対して寒さという抵抗があり、努力を伴うので、「起き出す」の方が容認されやすい。（13b）のようにあまり努力しなくて済んだというような場面を設定すると「起き出る」の容認性が上がるように思われる。

(14)a. このビルは周囲の建物よりも頭一つ抜け出ている（?抜け出している）。
b. 彼の実力はクラスの中でも抜きん出ている（*抜きん出している）。

（14a）では、建物が高く伸びることにさして障害は感じられないため、「抜け出ている」の方が適切である。「抜け出している」とすると、まるで周囲の建物と高さの競争をしており、簡単には一位になれない状況であるかのように感じる。この形が変形した（14b）の「抜きん出る」という表現が可能で「*抜きん出す」が不可能なのも、他の人たちを大きく引き離して一人だけが優秀である状況を強調して表すため、このような競争や摩擦を感じないためだと考えられる。

「V-出る」がこのような摩擦や抵抗のニュアンスを持つのもやはり「自身を外へと押し出す力」のイメージから生まれるもので、「その力によって抵抗に打ち勝つ」ことが連想されるからだと考えられる。

3.3. 「-出る」に言い変えられない用法

通常、自動詞が「-出る」に連結されることに大きな問題はない。しかし「-出す」には連結しやすく「-出る」には連結しにくいものもいくつか存在する。

「張り出す」「せり出す」に関しては、「?張り出る」「?せり出る」は容認されにくい。

(15)a. {突き出した／張り出した／せり出した} おなか
b. {突き出た／?張り出た／?せり出た} おなか

「張る」はもともと「たるみなく引き伸ばす」「はちきれそうに膨らむ」という意味であるし、「迫(せ)り」とは歌舞伎の舞台で用いられる、役者を舞台上に押し出す装置のことである。そのため「突き出る」に比べて、「張り出す」「せり出す」には、内部からの圧力によって自分自身を押し出す強力なイメージがあり、抵抗に抗って再帰的に自らを押し「出す」という図3（b）のイメージの方が容認されやすいものと思われる。

また、「乗り出す」「繰り出す」に関しても、「*乗り出る」「*繰り出る」という表現は容認されない。

(16)a. その人気俳優が現れると、観客は彼をよく見ようとして身を乗り出した。
　b. わが社はこの度、新しい事業に乗り出すことを決定した。
(17)a. ダンサーは次々と見事な技を繰り出した。
　b. さあ、みんなで街へ繰り出そう。

（16a）の「乗り出す」は他動詞で、自分の上半身に体重を乗せて前方へと突き出す様子を表現しており、通常上半身が収まっている範囲外へと上半身を「出す」様子が表現されている。（16b）ではこれをメタファー的に使用して、それまでの自社の業務の範囲外に進出することを「乗り出す」と表現している。この場合の「-出す」は、ちょうど（16a）で「自身の身体の一部を乗り出す」のと同様、「自分自身を乗り出させる」という再帰的な意味で解釈され、自動詞として使われている。（17a）の「繰り出す」は、本来は「（糸を）手繰るようにして送り出す」という意味の他動詞であるが、現在ではメタファーとして「（技を）次々に出す」「（兵士を）次々に送り出す」という意味で使用されることが多い。そして（17b）ではやはり「自分たちを送り出す」という再帰的な意味を含む自動詞となっている。これらの例でも図3に示したように、「出す」という行為の主体と「出る」という行為の主体とが同一視されているようである。

しかしこれらの例は上記のようなメタファーを介して発達したために、「乗り出す」「繰り出す」という表現が固定化されてしまっている。そのためこれを「乗り＋出す」「繰り＋出す」と再分析し、「自動詞なのだから『乗り＋出る』『繰り＋出る』だろう」と考えることは難しくなっているのである。そもそも元の表現について「*上半身が乗り出る」「*技が繰り出る」という言い方は容認されない。

4．結論

本稿では、日本語の補助動詞「-出す」が自動詞に接続される用法について考察した。「-出す」は本来他動詞に現れていた2つの参与者が同一視され、「自らを押し出す力によってある範囲外へと移動する」という意味の自動詞の用法を獲得したことを提案した。また「-出す」は「-出る」とは違い、(i) プロセスよりも最終状態に焦点が置かれること、(ii) 移動に対して何らかの抵抗があるかのようなニュアンスを持つことを指摘し、これを元に様々な例を綿密に検証することで、「-出る」と「-出す」の容認性やニュアンスの違いについても説明が可能であることを示した。

これらの表現については、容認性にも個人差が大きく、また慣用化による影響も大きいと思われる。今後はより多くのインフォーマントの判断を取り入れ、歴史的な変遷についても調査を進め、この現象の全体像を明らかにしたい。

注

1．「V-出す」には「V-し始める」という用法もあるが、混乱を避けるため、本論では「外部へ出る／現れる」という用法のみを扱う。

2．姫野（1977）も日野（2002）も「(部屋の外へ）駆け出る」を容認不可能としているが、筆者の判断では容認可能であるし、広辞苑第六版にも、「駆けて出る」という語義が掲載されている。しかし「*(新しい事業へ）乗り出る」はやはり容認不可能である。

3．通常、参与者の行為を表す一重矢印は参与者を起点として描かれるのだが、ここでは移動した結果状態や出現の意味を視覚的にわかりやすく表すため、参与者を矢印の着点に表示した。

4．図2（b）で示した主体的な移動の認知の例も存在する（例えば（3b）や（7b））のだが、ここでは煩雑さを避けるために省略した。

参考文献

姫野昌子（1977）「複合動詞『～でる』と『～だす』」『日本語学校論集』第4号, 71-95, 東京外国語大学外国語学部付属日本語学校.

日野資成（2002）「複合動詞『一出す』の分類—統語的・意味論的方法を使って」『日本研究』第25集, 135-147, 角川書店.

Langacker, Ronald W. (1999) *Grammar and Conceptualization*, Mouton de Gruyter, Berlin and New York.

Langakcer, Ronald W.（2002）*Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*, 2nd ed., Mouton de Gruyter, Berlin and New York.

徐民靜（2007）「複合動詞『～出る／～出す』の意味分析（一）」『日本言語文化研究』第11号, 46-61, 日本言語文化研究会.

徐民靜（2008）「複合動詞『～出る／～出す』の意味分析（二）」『日本言語文化研究』第12号, 27-44, 日本言語文化研究会.

On the Transitive-Intransitive Alternation of the Japanese -DASU

Fumihiro MORIKAWA

The Japanese subsidiary verb -DASU originates in the verb DASU, which describes the action of moving an object toward the outside of some range. So, when it is connected to another transitive verb, it works as if it is a particle, adding the meaning "outside" to the verb. Its intransitive counterpart is -DERU, which is derived from the verb DERU, and add the meaning "outside" to the main intransitive verb. However, some intransitive verbs can be connected to both -DERU and -DASU, and there seems to be little substantial difference between the meanings of the results.

This paper argues that the intransitive usage of -DASU was derived from its transitive usage by construing the actor and the mover as the same participant. As a result, the meaning of the intransitive subsidiary verb (i) focuses on the resultative state of the movement and (ii) implies the existence of some friction or difficulty of getting out, which explain the difference of acceptability and nuances of many sentences. It also points out that there are some metaphoric idioms, which, for some reasons, are not compatible with -DERU. I hope this paper helps to figure out the mysterious behaviors of -DASU and -DERU.